

サッカレーの娘としての恩恵と呪縛

—— 父の伝記作家になったアン・サッカレー・リッチー ——

矢 次 綾

松 山 大 学
言語文化研究 第40巻第2号（抜刷）
2021年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 40 No. 2 March 2021

サッカレーの娘としての恩恵と呪縛

—— 父の伝記作家になったアン・サッカレー・リッチー ——

矢 次 綾

I 序

アン・サッカレー・リッチー (Anne Thackeray Ritchie, 1837-1919) は、20 世紀の初頭以降ほとんど読まれなくなってしまったが¹、19 世紀後半の人気作家である。小説家としての彼女の才能について、例えば、ジョージ・エリオット (George Eliot, 1810-80) やヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) が、最初の長編小説『エリザベスの物語』 (*The Story of Elizabeth*, 1862-63) を引き合いに出して称賛している²。もっとも、40 歳になった 1877 年に、父方の親戚で、17 歳年下のリッチモンド・リッチー (Richmond Ritchie, 1854-1912) と結婚し³、相次いで二子 (Hester Ritchie Fuller, 1878-1960 ; William Thackeray Denis Ritchie, 1880-1964) に恵まれた頃から、リッチーは作家としての仕事の中心を、伝記的な要素が色濃い回想録やエッセイへと推移させていく。その一因として、育児と小説執筆の両立は困難だったことが挙げられるだろう。その証拠にリッチーは、義姉のエミリ (Emily Ritchie, aka. Pinkie, 1851-1932) への書簡に、「ヴォルフガングが赤ちゃんだったとき、ゲーテが作品を書いたとは思えない」と記している。ただし、リッチーの最高の小説と評されることが多い『ダイヤモンド夫人』 (*Mrs Dymond*) は、子供たちがまだ幼かった 1885 年に出版されており、執筆中にエミリへの書簡の中で、自分自身を、ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の『荒涼館』 (*Bleak House*, 1852-53) の登場人物で、家庭を顧みない母親として否定的に描かれているジェリビー夫人 (Mrs

Jellyby) に喩えている (Gérin 203)。子育ての傍ら小説を執筆することの大変さを痛感しながら、場合によっては、子育てに集中していないことへの罪悪感を抱きながらの執筆だったのであろう。もっとも、アプリンが推測しているように、リッチーは、1871年頃には既に『ダイヤモンド夫人』を構想していたと考えられる (Aplin 49)。その証拠に、この小説には、リッチーが、父サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の従妹でパリ在住のシャーロット・リッチー (Charlotte Ritchie, 1820-78) を訪問したときに目撃した普仏戦争 (1870-71) の様子を書き込まれている。つまり、1875年の妹ミニー (Harriet Marian Thackeray, 1840-75) の妊娠中毒による急死に遭い、結婚と出産を経験した1870年代に、思うように執筆を進めることができなかった『ダイヤモンド夫人』を、リッチーが何とか書き上げたのが1885年だったと推測される。

『ダイヤモンド夫人』出版の数年前において、リッチーは既に、作家として方向転換を開始していた。リッチーは、初めての本格的な伝記『セヴィニエ侯爵夫人』 (*Madame de Sévigné*) を、ブラックウッド社版「英国の読者のための海外古典シリーズ」 (*The Foreign Classics for Blackwood*) の一編として1881年に出版し、好評を博していたのである。それが大きなきっかけとなり (Gérin 197-200; Aplin 34), リッチーは、『女性作家読本——ミセス・バーボールド、ミセス・オーピー、ミス・エッジワース、ミス・オースティン』 (*A Book of Sybils: Mrs. Barbauld, Mrs. Opie, Miss Edgeworth, Miss Austen*, 1883) を始めとした³⁾ 伝記もしくは伝記的要素が濃い作品を多産していく。ミニーの夫、レズリー・ステイーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) は、後に二人目の妻になるジュリア・ダックワース (Julia Prinsep Duckworth, née Jackson, 1846-95) 宛ての1877年の書簡の中で、小説家としてのリッチーを「悪いヴァイオリンしか持っていない一流の音楽家」や「絵具や筆が乱れているために、輪郭がはっきりせず混乱したような絵画しか書けない、尊敬すべき画家」と呼び、天分を認める一方で、その技量を軽んじていた (Gérin 177) が、伝記作家としてのリッチーの力量は評価していたようである。なぜなら、ステイーヴンは、編者を務めた『英国伝

記事典』(*Dictionary of National Biography*, 1886) のエリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning, 1806-61) の項の執筆をリッチーに依頼しているからである。彼は、バレット・ブラウニングについてのリッチーの記述を後に高く評価している (Gérin 200)⁴⁾。以上に挙げた数作を始め、リッチーの伝記もしくは伝記的要素が濃い作品の中で、英仏の先輩女性作家に関するものが目に付く。それらを統合すれば 17 世紀以降の英仏女性作家列伝と呼べそうなものが完成し、注目に値する。もちろん、リッチーは女性作家以外についても回想録やエッセイも書いている。『英国伝記事典』のバレット・ブラウニングの項を改訂し、テニスン (Alfred Tennyson, 1809-92)、ラスキン (John Ruskin, 1819-1900)、ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-89) との交流についての回想録も加えた『テニスン、ラスキン、ロバートおよびエリザベス・ブラウニングの記録』(*Records of Tennyson, Ruskin and the Robert and Elizabeth Brownings*, 1894) など、ヴィクトリア朝の文化人についての記録文書を多産したことも、伝記作家としてのリッチーの特徴だと言える。

リッチーのこの種の作品群に関して、もう一つ、忘れてはならないのは、彼女が父サッカレーの全集、各巻のために「序文」を執筆していること、すべての「序文」を統合すれば、サッカレーの伝記になることである⁵⁾。この件に限らず、作家としてのリッチーについて語るときに、サッカレーに触れないわけにはいかない。リッチーが憧れのシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) をはじめとした先輩作家や、同時代を代表する文化人たちと直接的に交流し、その経験を回想録に記すことができた理由は、祖母 (Anne Becher Thackeray, 1792-1864. aka. Mrs. William Henry Carmichael-Smyth) と共にパリで過ごした幼少時代にショパン (Frédéric François Chopin, 1809/10-49) の演奏を聴き、ジョルジュ・サンド (George Sand, aka. Amandine-Aurore-Lucile Dupin, 1804-76) の姿を劇場で垣間見るなどしたことを除けば⁶⁾、サッカレーの娘だったからに他ならない。リッチーが弱冠 22 歳で『コーンヒル』誌 (*The Cornhill Magazine*) という作品発表の場を与えられて文壇デビューを果たし、その後も継続的に作

品を寄稿できた理由として、サッカレーが同誌の編集長だったことが大きいだろう。そのような恩恵をリッチーはサッカレーの死後も受け続けた。リッチーが『セヴィニエ侯爵夫人』の執筆を依頼されたのは、コルビーによれば、サッカレーの娘だったからである。換言すれば、リッチーが尊敬する先輩作家で友人でもあり、「英国の読者のための海外古典シリーズ」の編集者でもあったマーガレット・オリファント (Margaret Oliphant, 1828-97) は、サッカレーの娘としてのネーム・ヴァリューを見込んで、リッチーに『セヴィニエ侯爵夫人』の執筆を依頼したのであり、その時点において、リッチーの力量を必ずしも評価していなかった (Colby 261-62; n. 43)。要するに、リッチーは、サッカレーの娘としての恩恵に与って、伝記作家としての足掛かりをつかみ、その後の方向性を確定させたことになる。

その一方で、リッチーは高名な父の呪縛もまた感じていたのではないだろうか。筆者の知る限りで、リッチーはそれを公然と表明していないが、例えば、駆け出しの小説家として『コーンヒル』誌に寄稿した作品において、リッチーは抑圧的な父に対する反発を匂わせている。そして、1963年のクリスマス・イヴにサッカレーが急死し、彼の伝記を誰が執筆するかという問題が湧き起こると、リッチーは否応なく、その渦中に巻き込まれる。父の死から約30年を経てリッチーは重い腰を上げ、父の全集の編纂と各巻の「序文」——既に言及したように、事実上のサッカレー伝——執筆に着手するわけだが、これは言うまでもなく大仕事であり、彼女はそれに翻弄されるようになる。以上の点を念頭に置きながら、リッチーが父サッカレーからどのような影響を受け、作家としていかに対処しようとしたのかを、サッカレーの生前と死後に分けて吟味する。

Ⅱ 父サッカレーの死まで

サッカレーがリッチーの才気について感嘆した早期の例として、妻イザベラ (Isabella Gethin Shaw, 1816-94) の姉もしくは妹のジェイン (Jane Gethin Shawe)

に宛てた手紙における、9歳のリッチーについての「私は娘が天分のある男になるのではないかと心配しています。気立てがよく愛情深い女性になってもらいたいのですけどね」(*Thackeray's Daughter* 30)というコメントがある。パリ在住の実母のもとに預けていたリッチーとミニーと再び一緒に暮らし始めたころであり、⁷⁾ サッカレーは成長したリッチーの利発さにあらためて目を見張ったのであろう。サッカレーが書簡に記した「気立てがよく愛情深い女性になってもらいたい」という願望は、パトモア (Coventry Patmore, 1823-96) が『家庭の天使』(*The Angel in the House*, 1854) を出版する10年近く前とは言え、女性の領分は家庭にあるというイデオロギーが支配的であり、文筆業は男の仕事と見なされていた当時において、至極当然であろう。

しかしながら、サッカレーは、その言葉とは裏腹に、娘を文筆家に育て上げるべく、英才教育を施すようになる。すなわち、リッチーが14歳になると自分の筆者としての役割を娘に託し、自分の著作を誰よりも早く読む資格を与えた (MacKay 57)。そうすることによってサッカレーは、作家の仕事とはいかなるものかについて、娘リッチーに学習させようとしたと考えられる。十代半ばにおいて既に小説を書き始めていたリッチーだが、15歳のときに父から与えられた、「駄文を書いて時間を無駄にせず、他の人が書いた本を読みなさい」(*Thackeray's Daughter* 87-88) という指示に従って読書経験を積み、文学者としての素養を身に着けている。リッチーが父の友人、ミセス・ファンショー (Mrs Farnshawe) に、主婦になるのではなく職業を持ちたいと書簡の中で主張するのは、18歳の時だが⁸⁾ その数年前から彼女は、自分が将来的に就くべき職業として、文筆業を念頭に置いていたのであろう。このような下積みを娘にさせる一方で、サッカレーは、例えば1856年の書簡の中で、「絵画教師が何と言おうと、娘は絵がとても上手で、彼女の年齢のときの私よりもずっとうまいです。文章についても同様です」(Shankman 35) と述べ、当時19歳だったリッチーへの期待感を表現している。

リッチーが22歳になると、サッカレーは彼女に「お前に相応しい題目が見

つかったぞ」と言って本格的な執筆活動を開始させる。そうしてリッチーが書いたのが、イースト・エンド・オブ・ロンドンのスピタルフィールズ (Spitalfields) にある貧民学校 (ragged school) や、ユダヤ人の慈善学校 (charity school) における教育について記したエッセイで、デビュー作の「小さな学習者たち」 (“Little Scholars,” 1860) である。続けてリッチーは、生活難に喘ぐ人々について執筆したエッセイ「困窮者と独身者」 (“Toilers and Spinsters,” 1861) を発表する。以上二編のエッセイは『コーンヒル誌』に掲載されたが、同誌上のその他の作品と同様に、匿名で掲載された。しかしながら、サッカレーがリッチーのデビュー作出版から3日も経たないうちにデイヴィソン (Davison) という友人に、「『コーンヒル誌』の5月号を読んで欲しい。うちのぼちゃぼちゃのアニー (my dear old fat Anny) の『小さな学習者たち』が載っているから」と書簡で知らせるなどしたために、作品の匿名性はすぐに失われたようである (Gérin 119)。なお、サッカレー自身やディケンズを始めとした当時の大物小説家たちの多くが小説を書く前段階として、スケッチ風のエッセイを書いていたこと、初期の小説には、そのようなエッセイの集積としての要素を見出せることを考慮するなら⁹⁾、サッカレーが娘の文筆家としてのキャリアを小説ではなくエッセイから開始させた背景には、小説家として踏むべき段階を娘に順調にたどらせたいという彼の親心があった可能性が高いと言えよう。そのような父のバックアップを受け、リッチーは1862年9月から翌年の1月にかけて、初の長編小説『エリザベスの物語』を同誌に連載して好評を博し、文筆家として着実に歩を進めていくのである。

文筆業はリッチー自身が志したことだと推測できるが、そうだととしても、彼女が父の敷いたレールを歩かされていたことに変わりはないだろう。既述したように、リッチーは父への反発心を公然と表現していないようだが、自立心旺盛で自我の強いリッチーが、父を敬愛し、有名作家の娘として自分が多大な恩恵を受けていることを理解していたとしても、父にただ従っていたとは考えにくい。リッチーが強い自立心を持っていた証拠として、例えば、サッカレーが

1855年にアメリカ講演旅行に出かけ、一時的だがバリ在住の祖母の庇護を再度受けることになったとき、18歳のリッチーは祖母と同居することを拒み、ミニーと共に祖母宅の隣のアパートマンに滞在している（Gérin 101）¹⁰⁾ 父サッカレーに対する、小説家リッチーの葛藤と反発を示唆する例として、『エリザベスの物語』の結末がある。リッチーは、父の助言を受け容れて当初の計画を変更し、精神的に未熟なヒロイン（Elizabeth Gilmour）が初恋の相手、サー・ジョン（Sir John Dampier）と結ばれるハッピーエンドを描くと同時に、その不満を、語り手で彼女自身のペルソナと解釈できるミス・ウィリアムソン（Miss Mary Williamson）によるエリザベスの今後についてのコメントを通して仄めかしているのである¹¹⁾ 要するに、リッチーは小説の結末で、エリザベスの母親キャロライン（Caroline Gilmour）の再婚相手の家であり、結婚前のエリザベスも住んでいたトゥルヌール（Tourneur）家を、ミス・ウィリアムソンに遠くから眺めさせ、エリザベスが「その壁の中で囚人（prisoner）になって、鳥かごの横木に激しくぶつかり、自由になろうともがいていた」（76）可能性について思いを巡らせている。その段階でエリザベスは「その壁」の外でサー・ジョンと既に結婚しており、「囚人」になっているのは母親のキャロラインなのだが、ミス・ウィリアムソンは、キャロラインの再婚とエリザベスの結婚を重ね合わせ、エリザベスが母親同様の「囚人」になるのではないかと懸念していると解釈することが可能である。なぜなら、エリザベスとキャロラインはお互いによく似ていて、キャロラインにとって娘は一時期、サー・ジョンを巡る恋敵に他ならなかったから（7，9）である。さらに「囚人」キャロラインの再婚が娘の気持ちを考えない点で身勝手なものであり（16，17，19），牧師の妻としての権威の獲得を目的とした短慮なものだったこと（15）を考慮すれば、人生の教訓を無にしてエリザベスがした結婚も同様に短慮なものだと言える。したがって、母親と同様の人生をエリザベスがたどる可能性は十分にあると考えられるからである。要するにリッチーは、エリザベスとサー・ジョンの結婚という、表面的で短絡的なハッピーエンドを描かざるをえなかったことへの不満を

公然と表現していないが、ミス・ウィリアムソンの意味ありげな言葉を通して暗示していると考えられるのである¹²⁾

サッカレーはリッチーが文筆家として歩むべきレールを敷き、『エリザベスの物語』の結末に多大な影響を与えた直後、すなわち、リッチーが『エリザベスの物語』の連載を終えた約一年後の1863年のクリスマス・イヴに急死する。ローマでブラウニング夫妻と親しく交流した1853年にマラリアを患って以来、サッカレーの健康状態は決して良好ではなかった。父の急逝に衝撃を受け、憔悴したリッチーは、かねてからの知り合いであり、母親代わりであるかのように自分と妹のミニーを見守ってくれていた写真家のジュリア・マーガレット・キャメロン (Julia Margaret Cameron, 1815-79) の招待を受けて、ミニーと共にワイト島のフレッシュウォーターに赴き、キャメロン邸の別棟で数か月を過ごしている¹³⁾。そうすることによって、リッチーは、父の急死によって生じた喪失感を癒しただけではなく、偉大な作家の死に際し、近親者として、そして、「書く」という仕事を受け継いだ者として負うべき責任から、一時的に逃れていたのではないだろうか。その証拠に、リッチーは父の死から3カ月も経たないうちに、誰がサッカレーの伝記を書くのかという、彼女が避けて通ることのできない大問題を突き付けられる。この問題は彼女にとり憑き続け、その約30年後にやっと彼女は執筆者として、父の全集の編集者として重い腰を上げるのである。

Ⅲ 父の死後——伝記執筆という重圧

結論を先に言えば、サッカレーの伝記を誰が書くかという問題は、リッチーにとって高名な父による最たる呪縛だったと言えそうである。この問題を最初に彼女に突き付けたのは、父の旧友で、出版社スミス・エルダー社 (Smith, Elder & Co.) のジョージ・マレー・スミス (George Murray Smith, 1824-1901) だった。リッチー自身が『コーンヒル誌』の寄稿者としてスミスと関わっていたこ

とは言うまでもないだろう。次の引用は、リッチーに宛てたスミスの書簡の一部で、サッカレーの死から未だ3カ月を経過していない1864年3月17日付である。

Your Father's life will be written ; and it is desirable that the writer should be one, who can do justice to your Father's memory and also would have the advantage of your aid and of reference to papers and documents — It is not necessary to decide on the author nor desirable that the Book should be immediately commenced but it would be well to warn off Biographies by announcing that such a work is in preparation. (Aplin 73-74)

スミスの趣旨は、サッカレーの功績を正に評価できない誰かが伝記を書かないよう、牽制すべきだとリッチーに警告することにある。すなわちスミスは、リッチーにサッカレー伝を執筆するよう迫っているわけではないが、サッカレーの法定相続人であり、彼の原稿の著作権者として、リッチーはサッカレーの伝記執筆と言う問題に関わらざるを得ないことを示唆し、早い段階でその事実に向き合うよう、リッチーを促しているのである。それと同時にスミスは、伝記執筆の準備が既に進行中だと公表するようリッチーに提言することを通して、当代の大家作家サッカレーの伝記執筆もしくは出版をめぐる騒動が近々起きるのではないかという懸念を示している。その後の約10年間については、目立った騒動は起きていないようであるし、リッチーが問題解決に動き出した形跡もないようである。ところが、1875年、匿名の編者によるサッカレー全集 (*Tharkerayana*) が出版され、その各巻に付けられた「序文」が事実上初のサッカレー伝となってしまう。リッチーとミニーは激怒し、ヘンリー・ジェイムズは「どうしてミス・サッカレーは彼女の高名な父親の伝記を書こうとしないのか」と、公然とリッチーに伝記執筆を迫っている (Aplin 119)。それでも、リッチーが問題解決に向けて動き出すことはなかった。その一方で、サッカレーの

人生について知りたいという世間一般の願望や、サッカレーの書簡を出版したいという英米の出版社の意向は高まる。その中で、例えば、トロロプ (Anthony Trollope, 1815-82) が、マクミラン (Macmillan) 社の「イングランドの文学者」 (*English Men of Letters*) シリーズの一作として、サッカレー伝 (*Thackeray*, 1879) を執筆することになる。執筆するにあたり、トロロプはサッカレーの書簡を閲覧したいとリッチーに願い出て、断られている (Aplin 36)。断ることでリッチーが父のプライバシーを守ろうとしたのかどうかについては、想像の域を出ない。アプリンによれば、トロロプは、文筆家ジェイン・オクタビア・ブルックフィールド (Jane Octavia Brookfield, 1821-96) とサッカレーの間にあったと噂される恋愛関係や、イザベラの統合失調症に、サッカレー伝の中で言及しないことによって、娘としてのリッチーの心情に対する配慮を示したようだが、サッカレーが得ていた収入について、リッチーがトロロプに打ち明けた可能性が高い金額を「十分な額」として記したため、リッチーを立腹させたという (36-37)。サッカレーの書簡の出版を求める声や、出版を希望する出版者とのやり取りにも、リッチーは関わらざるを得なかった。特に、ブルックフィールドや、家族ぐるみの交流があった、ニューヨークのバクスター (Baxter) 家が所持する書簡に関する対処が、リッチーにとって特に頭の痛い問題だったようである (74-77)。

サッカレーの伝記や書簡に関わる問題に長らく煩わされた後に、リッチーは、父から受け継いだものは自分が守らざるを得ないという責任感もしくは重圧から、重い腰を挙げている。そして、1892年8月のジョージ・スミス宛ての書簡の中で、リッチーは、父の全集を編纂し、伝記として読むことができる「序文」と「注釈」を執筆したいという意味——事実上のサッカレー伝執筆の意思——をおそらく初めて表明している。次の引用が、書簡の該当箇所である。

I have been thinking over my little dream of an edition with notes of my Fathers works. I brought a great parcel of his old letters down here to look

thro' and there are so many things w^h. w^d be of interest — as to when & how V. F. was written for instance — as to his view of Ireland & Home Rule — notices of the books he is reading & so on — all this with the dates of where he was & where he wrote his various books & a few very few little fillagrees [*sic*] of mine w^d. I do think add to the interest of the books. You see how well those little scraps of thinks in Macmillan do, & this w^d. be such a good way of saying anything one wanted to say — It might even be an edition without pictures so as not to interfere with those w^h. exist, but with notes so as to add a certain biographical value. (Aplin 122)

以上の決心をするまでに長い年月を要した理由として、リッチーがサッカレーの「総序」(General Introduction)の中で公言したのは、サッカレーが自分の伝記が執筆されることを望んでいなかったことである。次の引用が、その該当箇所である。

My father never wished for any Biography of himself to be written and for this reason I have never attempted to write one. It is only after a quarter of a century that I have determined to publish memories which chiefly concern his books. Certain selections from his letters are also included, which tell of the places where his work was done, and of the times when he wrote. So much has been forgotten, so much that is ephemeral has been recorded, that it is my desire to mark down some of the truer chords to which his life was habitually set. For this reason I have included one letter to my Mother among the rest : it will show that he knew how to value the priceless gifts of home and of happiness while they lasted, as well as to bear trouble and loneliness when they fell upon him. (Ritchie, "General Introduction" 18)

既述したように、1870年代から80年代にかけてリッチーが、妹ミニーの死に遭い、そして、結婚と二度の出産を経験して多忙だったこと、『セヴィニエ侯爵夫人』を始めとした伝記もしくは伝記的な要素のあるエッセイの執筆、最後の小説『ダイヤモンド夫人』の執筆に追われていたことも、父の伝記執筆という大仕事を引き受けられなかった理由として大きいだろう。さらに、1887年、50歳になったリッチーは慢性的な体調不良に陥ると同時に、夫リッチモンドの恋愛関係に悩まされるという苦難も経験している¹⁴⁾

以上で述べた理由の他に、サッカレーが残した書簡を始めとした文書が膨大な量であり、それを整理するだけでも大仕事だったことも、リッチーが父の伝記執筆を躊躇した理由だったのではないだろうか。偉大な父が残した文書を整理して資料にし、伝記を執筆することの重圧と、払わなければならない犠牲の大きさについて、レズリー・スティーヴンと再婚相手のジュリアの娘、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) が、『夜と昼』(Night and Day, 1919)の中でリッチーの代わりに描出している¹⁵⁾。そうしたことについてウルフは書簡の中で、リッチーの子供たちが「私に激怒」(furious with me)しているのではないかと述べ、実際に彼らは気を悪くしたようだが(Aplin xi)、『夜と昼』のヒロイン、キャサリン (Katherine Hilbery) の母親ヒルベリー夫人 (Mrs Margaret Hilbery) が、桂冠詩人だった亡き父の残した文書の整理と、それを資料にした父の伝記執筆に忙殺されたように、リッチーも、多大な時間とエネルギーを同様の作業に費やしたに違いない。ヒルベリー夫人の様子をウルフは次のように叙述している。

Lately, however, it had seemed to her that they were making no way at all, and this was the more tantalizing because no one with the ghost of a literary temperament could doubt but that they had materials for one of the greatest biographies that has ever been written. Shelves and boxes bulged with the precious stuff. The most private lives of the most interesting people lay furled

in yellow bundles of close-written manuscript. In addition to this Mrs Hilbery had in her own head as bright a vision of that time as now remained to the living, and could give those flashes and thrills to the old words which gave them almost the substance of flesh. She had no difficulty in writing, and covered a page every morning as instinctively as a thrush sings, but nevertheless, with all this to urge and inspire, and the most devout intention to accomplish the work, the book still remained unwritten. (Woolf 29)

多少の誇張や揶揄が仮にあるとしても、ウルフの描写は、一家の主婦が偉大な父親の遺品を整理し、それを基に伝記を書くという作業がどのようなものかについての真実を描出しているのではないだろうか。リッチーは父の伝記執筆をやり遂げ、決定版的な全集の出版に大きく寄与したわけだが、それでも埋めるべきページが多すぎて途方に暮れるような思いを、公にしていなくても何度も経験したはずである。

* * * * *

20世紀の初頭以降、リッチーの作家としての力量が正当に評価されず、忘れられた作家に貶められている理由として、マッケイが述べているように、彼女がサッカレーの従属物 (satellite) と見なされ、作品が読まれるとすれば、サッカレーについての情報を収集するため (MacKay 56) であることを否定できないだろう。そのような事態をリッチーが仮に予想していなくても、また、オリファントが『セヴィニエ侯爵夫人』の執筆を自分に依頼した理由として、サッカレーの娘としてのネーム・ヴァリューが大きかったことを仮に知らなくても、リッチーは自分がサッカレーの娘だから、その作品を読んでもらえることを、心のどこかで意識せざるを得なかったのではないだろうか。その証拠の一つとして、リッチーの作品は、リッチモンドと結婚した1877年よりも後に

出版されたものであっても、作者名としてミス・サッカレーと記され続けた。リッチモンドがインド省での功績により1907年に叙勲され、サー（Sir）の称号を得ると、作者名としてミス・サッカレーの代わりにレディ・リッチーと記されるようになるが、そうなった後でさえも、リッチーは、自分の作品が読まれるために、父サッカレーの名前が必要であること、すなわち、作品の売れ行きや評価に対し、父が死後も影響を与え続けていることを、心のどこかで受け容れざるを得なかったであろう。以上の点を考慮するなら、サッカレーの娘としての恩恵と呪縛をリッチーは生涯に渡って経験したことになる。

もっとも、文学や作家に関する研究が深化し、埋もれていた作家たちの作品が再読され、再評価され始めた現在、きっかけはサッカレーだとしても、リッチー作品が読まれれば、彼女の置かれた特異な立場、その中で執筆された作品に対する興味は十分に喚起されるのではないだろうか。そうして、リッチー自身が興味の対象となるとときに、彼女は父の呪縛から解き放たれるだけでなく、忘れられた作家と呼ばれることもなくなるはずである。

※本稿は、2019（令和元）年度松山大学特別研究助成の研究成果として執筆したものである。

注

- 1) この点について、拙論「ギヤスケルとアン・サッカレー・リッチー」42ページを参照。この論文は、リッチーが先輩作家ギヤスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-65）をどのように見なし、作家としての手本にしようとしたかを吟味することに主眼を置くものだが、リッチーが先輩作家ギヤスケルを評価する資格のあることを立証するために、リッチーに小説家としての力量について分析した。その際に、エリオットとジェームズのリッチー評を引き合いに出した。
- 2) リッチモンドは、サッカレーの叔母（Charlotte Sarah Thackeray, 1786-1854）の孫にあたる。この叔母の娘の一人が、本稿の中で言及したバリ在住のサッカレーの従妹シャーロット・リッチーである。
- 3) “Sybil” は女性作家を指す、リッチー独自の用語である。この著書のタイトルについて考えていたときリッチーは荒野で嵐に遭い、『マクベス』（*Macbeth*, 1806）に登場する魔女

を思い出した。そして、女性作家は誰もが魔女ではないかと考え、この用語を使用するようになったのである (MacKay 74)。

- 4) バレット・ブラウニングは、実母イザベラが統合失調症であったため、母親としての愛情や庇護を受けることができなかった子供時代のリッチーにとって、母親代わりと言える女性の一人である。この点については拙論「アン・サッカレー・リッチーの自覚とフェアリー・テイル・フィクションの枠組み」120~30 ページを参照。イザベラの症状については、後述の注 5) を参照。なお、イザベラの生年は 1818 年と記されている場合もある。例えば、アプリンは系図の中で 1818 年と記している (Aplin 278)。
- 5) リッチーの「序文」を掲載したサッカレー全集として、1898 年にスミス・エルダー社 (Smith, Elder and Co.) から出版された *The Biographical Edition of the Complete Works of William Makepeace Thackeray* と、1911 年にハーパー・アンド・ブラザーズ社 (Harper & Brothers) から出版された *The Centenary Biographical Edition of the Works of William Makepeace Thackeray* がある。「序文」をサッカレー伝として読めることは、全集のタイトルに付けられた “Biographical” という形容詞を通して明示されている。
- 6) リッチーの実母イザベラは第二子のジェイン (Jane Thackeray, 1838-39) を亡くし、第三子のミニーを出産した頃から産後鬱に苦しんでいた。3 歳になったリッチーをマーゲート (Margate) の海で溺れさせかけた一件をきっかけに統合失調症であることが無視できなくなり、子供を育てることができないと診断された (Gérin 10)。そのため、リッチーとミニーは 1840 年 11 月から 1846 年 9 月まで、サッカレーの実母とその再婚相手で退役軍人の (Henry Carmichael-Smyth, 1780-1861) と共にパリで生活することになった。子供時代にパリで遭遇したショパンを始めとした文化人についての回想録は、主に、1894 年にマクミラン社から出版された *Chapters from Some Memoirs* に掲載されている。最晩年のショパンの演奏を聴いた経験についてリッチーが記しているのは、その中の “My Musician” においてである。ジョルジュ・サンドについてのエッセイ “Nohant in 1874” は、1908 年にスミス・エルダー社から出版された *Blackstick Papers* に掲載されている。この書籍のタイトルになっているブラックスティックが父サッカレーのペルソナであることについては、拙論「アン・サッカレー・リッチーの自覚とフェアリー・テイル・フィクションの枠組み」126 ページを参照。
- 7) リッチーが幼い頃、父と別居していたことについては、一つ上の注 6) を参照。
- 8) ファンショール夫人へのこの書簡については、次次「アン・サッカレー・リッチーの自覚とフェアリー・テイル・フィクションの枠組み」130 ページを参照。
- 9) この点については、ガルチャが詳しい。ガルチャは、スケッチを小説に発展させる過程で、筆者は「見習い (student) から大先生 (professor)」(Garcha vii) に推移していると指摘し、サッカレー、ディケンズ、ギヤスケルが散文家から小説家になる過程について分析している。
- 10) 祖母と同居しなかった理由として、厳格なカルヴィニストの祖母に対する、リッチーの

強い反発心も挙げることができる。その反発心は、例えば、『エリザベスの物語』の中でヒロインの義父でカルヴィニストの牧師(Stephen Tournear)を、少なくとも小説前半部で、偏狭な人物として否定的に描いていることに表れている。エリザベスの義父は実在のカルヴィニストの牧師アドルフ・モノ(Adolphe Monod, 1802-56)をモデルに造形された。リッチーはパリで、祖母によってモノの宗教塾に通わされていた(Gérin 71-75)。なお、リッチーが15歳になった1852年に、サッカレーが最初のアメリカ講演旅行に出かけたときは、彼女とミニーはパリの祖母の家に同居している。

- 11) リッチーがサッカレーの助言を受け容れて『エリザベスの物語』の結末を変更したことについては、拙論「アン・サッカレー・リッチー作品における『眠り姫』たちと女性による人生の探求」9ページを参照。リッチーのペルソナとしてのミス・ウィリアムソンの役割については、拙論「アン・サッカレー・リッチーの自覚とフェアリー・テイル・フィクションの枠組み」121~24ページを参照。ミス・ウィリアムソンの社会的立場の詳細については、その中で述べているが、彼女を社会の周辺に位置する独身女性と設定した理由は、社会の中心に君臨する高名な男性作家である父とは異なる視点から物を語るという、自分の立ち位置を明示しているためだと解釈できよう。「家庭の天使」が理想とされる当時の女性観、もしくは、結婚して主婦になることがハッピーエンドと見なされることへのリッチーの反発は、その他の作品からも読み取ることができる。例えば、ペローの童話「青髭」を再話した「青髭の鍵」(“The Bluebeard's Keys,” 1874)において、リッチーは、ヒロインが最終的に結婚しない意思を固める様子を描き、それを「破談になったことが幸福な結婚話」(223)と呼んでいる。シュバルツ・マッキンジーの言葉を借りるなら、リッチー作品には、「結婚市場(marriage market)や、法的、経済な力をほとんど、もしくは全く持たない妻たちや母親たちの従属的な立場に由来する破壊的な結末についての注意を促す」(Schwartz-McKinzie x)という要素がある。

- 12) キャロライン・ギルモアのような自己中心的な母親は、その他のリッチー作品にも登場する。例えば、フェアリー・テイル・フィクション「森の眠り姫」(“The Sleeping Beauty in the Wood,” 1866)の母親も、キャロラインと同様に、娘のロール・モデルになれないばかりか、娘の自立を事実上妨げている。この点については、拙論「アン・サッカレー・リッチー作品における『眠り姫』たちと女性による人生の探求」11~13ページを参照。そのような身勝手な母親をリッチーが何人も描いている背景には、統合失調症の実母を、ロール・モデルにすることができないばかりか、同居していなくても、生涯に渡って世話をし続けざるを得なかったリッチーの娘としての苦悩があるのかもしれない。

- 13) キャメロンがリッチーにとって母親代わりであったことについては、マッケイが詳しい。マッケイは、リッチーが母親代わりとして慕った女性として、バレット・ブラウニングとジェイン・カーライル(Jane Carlyle, 1801-66)の他に、キャメロンの名前を挙げている(MacKay 57)。なお、フレッシュウォーターのキャメロン邸の別棟を、後にリッチーは譲り受け(Aplin 204)、晩年はそこで過ごすことが多かった。キャメロン家の別邸は“The Porch”

と呼ばれ、1913年にスミス・エルダー社から出版されたエッセイ集 *From the Porch* のタイトルにその名を残している。

- 14) リッチモンドと恋愛関係にあったのは、テニソンの次男ライオネル (Lionel Tennyson, 1854-86) の妻エレナー (Eleanor Birrell Tennyson, 1854-1915) である。リッチモンドと同じようにインド省 (India Office) の役人だったライオネルがインドで急死した後、リッチモンドはリッチーに促されて、未亡人となったエレナーを支援しているが、そうする間に恋愛関係に陥ったようである。結局、エレナーはライオネルと死別した2年後の1888年に、自由党の政治家で、後に国会議員になるオーガスティン・ビレル (Augustine Birrell, 1850-1933) と再婚し、リッチモンドはリッチーのもとを離れることはなかった (Gérin 214-16; Aplin 72, 77)。
- 15) ウルフは父レズリー・スティーヴンの最初の妻ミニーの姉であるリッチーを、アニー伯母さん (Aunt Annie) と呼んで慕い、リッチーが81歳で他界した約1週間後の1919年3月6日発行の『タイムズ・リタラリー・サブルメント』 (*Time Literary Supplement*) に、追悼文「レディ・リッチー」 ("Lady Ritchie") を寄稿している。その中でウルフは、既に読まなくなっているものの、リッチーの小説には読む価値があると主張すると同時に、読まなくなった理由を分析している。この点については、拙論「ギヤスケルとアン・サッカレー・リッチー」43~44ページを参照。『夜と昼』のヒルベリー夫人がリッチーをモデルに造形されていることについては、アプリンやブリッグスを参照 (Aplin xi-xii; Briggs xv)。

引用文献

- Aplin, John. *Memory and Legacy: A Thackeray Family Biography, 1876-1919*. Lutterworth, 2011.
- Briggs, Julia. "Introduction." *Night and Day* by Virginia Woolf. Penguin, 1992. pp. xi-xxxv.
- Colby, Vineta and Robert A. *The Equivocal Virtue: Mrs. Oliphant and the Victorian Literary Market Place*. Archon, 1966.
- Garcha, Amanpal. *From Sketch to Novel: The Development of Victorian Fiction*. Cambridge UP, 2011.
- Gérin, Winifred. *Anne Thackeray Ritchie: A Biography*. Oxford UP, 1981.
- MacKay, Coral Hanbury. *Creative Negativity: Four Victorian Exemplars of the Female Quest*. Stanford UP, 2001.
- Ritchie, Anne Thackeray. "Bluebeard's Keys." *The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie*. Edited by Heidi Anne Heiner. SurLaMoon Press, 2010. pp. 185-246.
- . "General Introduction." *Anne Thackeray Ritchie's Centenary Biographical Introductions to the Works of William Makepeace Thackeray* Vol. 1. AMS, 1988.
- . *The Story of Elizabeth with other Tales and Sketches*. Fields, Osgood, 1869.
- . *Thackeray's Daughter: Some Recollections of Anne Thackeray Ritchie*. Edited by

Hester Fuller Thackeray and Violet Hammersley. Euphorion, 1952.

Schwartz-McKinzie, Esther. "Introduction." *Mrs Dymond* by Anne Thackeray Ritchie. Sutton, 1997. pp. ix-xii.

Shankman, Lillian F. "Introduction : 1852-1858." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Ohio State UP, 1994. pp. 27-36.

Woolf, Virginia. *Night and Day*. Edited by Julia Griggs. Penguin, 1992.

矢次綾「アン・サッカレー・リッチー作品における『眠り姫』たちと女性による人生の探求」『言語文化研究』第37号第2巻(2018): 1-18.

———, 「アン・サッカレー・リッチーの自覚とフェアリー・テイル・フィクションの枠組み」『松山大学論集』第29号第5巻(2017): 119-35.

———, 「ギヤスケルとアン・サッカレー・リッチー」『ギヤスケル論集』第29号(2019): 41-51.